涙の数だけ優しくなれる

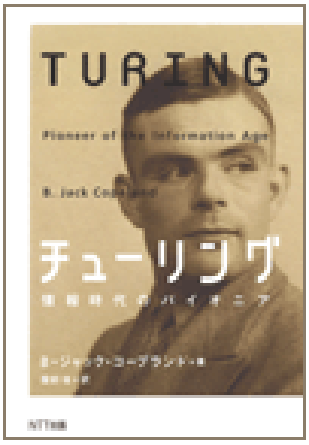
徐　丙鉄（情報学科）

人は涙する

フィリップ･K･ディック「アンドロイドは電気羊の夢を見るか?」ハヤカワ文庫 SF (229)

巷は人工知能や深層学習の話題で沸騰しているが、「アンドロイドは電気羊の夢を見るか」では、人間か人型アンドロイドかを判定するテストとして、感情移入能力を測定する。人には「惻隠の情」があるが、犬は他の犬が苦しんでいることを理解できない。人の人たる所以は「感情移入能力」にある、というのである。

一方、考えるコンピュータができたかどうかの判定として、チューリングが提唱したテスト（チューリング・テスト）がある。コンピュータか人間が入った小部屋があり、外部の人はテレタイプで小部屋の中へ質問する。小部屋からの応答はディスプレイに文字として表示される。外部の人が小部屋の中で人間が応答していると判断するような応答をコンピュータができれば、考えるコンピュータができたと判定するというのである。毎年、チューリング・テストのコンテストが繰り返されているが、2014 年度最も優秀なプログラムは 33%の人を騙した。チューリング･テストで､「感情移入できるかどうか」問うと、コンピュータは何と答えるのだろうか。



B･ジャック･コープランド「チューリング」NTT 出版

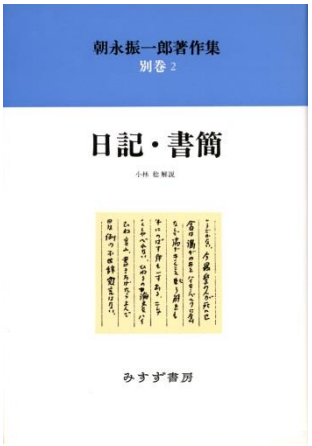
天才の涙

リチャード P. ファインマン「ご冗談でしょう、ファインマンさん」岩波現代文庫

物理学の分野にも綺羅星のごとき天才がいた。私は、ファインマンと朝永振一郎が好きだ。ファインマンも朝永も自然現象の数学的取り扱いに長けた理論物理学者である。奇しくも二人は同年に（1965 年）にノーベル物理学賞を共同で受賞する。

ファインマンの人となりは自伝「御冗談でしょう、ファインマンさん」に詳しい。第 2 次世界大戦中の米国で、原爆製造（マンハッタン計画）のためにニューメキシコ州の秘密基地に集められた物理学者達の中で、自分の頭の良さを示そうと様々なお茶目なこと、例えば金庫破り、をする様子はファインマンの面目躍如である。一方で、ウインドウのドレスを見て、「アーリーン（亡き恋人）の好きそうなドレスだな」と思って涙する。

朝永振一郎は湯川秀樹に次いで日本で二人目のノーベル賞受賞者である。大秀才と思っている人が多いと思うが､30 代にドイツのハイゼンベルグの許へ留学した頃の日記を読むと、石川啄木の短歌「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ　花を買ひ来て　妻としたしむ」を引いて、自分には重要な発見は何一つできないのではないかと劣等感に苛まれていたことが縷々書かれている。多分、夜ごと泣いていたんだろう。



朝永振一著作集「日記・書簡」みすず書房

リチャード P. ファインマン「ファインマン物理学」岩波書店

タベ眠れずに泣いていたんだろう

広島出身のロックシンガー、浜田省吾の「もうひとつの土曜日」の一節である。「日本のあらゆる場所には涙がしみ込んでいる。これが日本の情緒である。」と言った人がいる。人は生きると涙を流す。涙とともに人間らしさがある。人工知能は泣くだろうか。

石川啄木「一握の砂・悲しき玩具」新潮文庫刊